武田麟太郎全集

第二巻

新潮社

© Fumiaki Takeda 1977
Printed in Japan

武田麟太郎全集 第二巻

昭和五十二年十一月十五日印刷
昭和五十二年十一月二十日発行

セット定価九五〇〇円

著者 武田麟太郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一、電話東京 業務・二六六一五一一一、編集・二六六一五四一一、郵便番号一六二、振替東京四一八〇八
印刷所 塚田印刷株式会社
製本所 神田加藤製本

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

武田麟太郎全集　第二巻　目次

勘定　七
釜ヶ崎　二九
陥穽　四七
日月ボール　六二
現代詩　七七
車中の四人　八九
若肌　一〇一
朝の草　一一六
氷雨　一二九
好きな場所　一三〇
伝説　一三九
大凶の籤　一七九
因果のある述懐　一九三
死ぬこと　生きること　二〇七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

婚約者　二一八
蚊帳　二二二
二本の枝　二五一
情婦　二六二
娘　二七〇
結びつき　二八一
針仕事　二八九
雪の話　二九七
面影　三〇四
「毒婦伝」　三一三
時の間に　三一八
掃除夫になる　三二六
心境　三三一
分別　三三八

弥生さん　三四六
子惚気　三六三
《第二巻収録作品初出一覧》　三七三

編纂／和田芳恵・薬師寺章明

武田麟太郎全集　第二巻

勘　定

1

集金人太田亀吉は、思わず、顔の色をかえた。――こら、仲に入って事を決めたら、ええ儲けになる、と考えたのである。そこで、少しく上ずった声を出して、

「そのことを、なんで、もっと早う、云わなんだ」

と、相手の男を――同居人であり、もしかすると義妹の亭主になるかも知れぬ、文学青年田辺音三を叱るようにきめつけた。その勢いに、今まで次の間で乳呑児を寝かせつけながら、自分もうとうとしていた太田亀吉の女房は、肘枕の上ではっと癖のある三白眼を見開いて、どんな話なのかと、耳を傾けるのであった。

冬のあいだは、炭を無駄につかうのが実に惜しくて、こんなに晩くまで、だらだらと世間話をしていることはなかった。――だが、この二三日はすっかり陽気も春めいたので、その方の心配もなく、時々、田辺音三のバットを抜き取っては、珍らしく、うまそうにくゆらしながら、つい時を移したのである。

――話題の最初は、この二人ともがつとめている共生無尽会社で、近いうちに上級社員の整理があるらしいと云う噂についてであった。元来、この会社は、前任の専務と現在の専務とが仲悪く、事毎に対立して勢力争いをやっている。そして、長年勤続して来た上級社員の多くは、昔の関係で「旦那」（前の専務は自分のことをそう呼ばせていた）の系統に属しているので、重役は煙ったく、またかなりの高給を取っている点から、この際首にしようとしているらしいのであった。ところが、その少数の上級社員は、どうしても解雇されるならば、勤続手当や解職手当の内規を至急作るようにと、要求した。それらの内規が今日にいたるまで条文になっていなかったのも、実は、彼らが支持している、前の「旦那」の所謂、「会社は一家族」主義の名残りで、「そんな水臭いことを決めて置く必要はなかった」からであるが。――そこで、今までは軽蔑していたはずの下級社員の間を煽動して、その多数の力を借りようとして

いたのである。会社は、この策動に対しては、次のように宣伝して、全社員の動揺を防がねばならなかった。――即ち、そう云う手当法はすでに考慮中であったから、遠からず発表して諸君を満足させ得ること、また彼ら上級社員整理後は、彼らが徒らにむさぼっていた高い月給は全社員の上に割当てられて来るのは「自然の理」であるが、もしも彼らの首をつないで置けば、人件費の都合から、どうしても下級社員の多数が代りに犠牲にならねばならぬだろう、云々。こうした状態の中で、社員の意見も色々と分れ、論議されているのであるが、殊に「共生文学」と云う同人雑誌を出している社内の文学サークルでは、この機に種々な待遇改善のために要求を出すべしとの派と、そんな上級社員のおだてに乗るのは面白くない、それは唯、彼らに莫大な勤続手当を受取るように尽力してやる結果になるだろう、自重した方がよい、との派に分れて、なかなか態度がきまらなかった。――このことを、そのサークルに属している文学青年田辺音三は太田亀吉にくわしく語ったのである。彼としては、どっちでもええやないか、まア僕ら文学やってるもんは、そんな問題に係りとうはない、と云う考えを附け加えて。――

太田亀吉は、「旦那」の系統なのである。と云うのは、子供の時から、給仕に出、前の専務に眼をつけられて、準社員にあげて貰ったのを恩にきているはずであった。小心なのと、「旦那」の前では骨身惜しまず働き、何とかして金を貯めたいと、無駄使いせずケチケチしている様子が気に入られて、兵隊から帰って女房を貰い身をかためると、保証金の積立てもなしに、そんな破格な取扱いで、外交の集金へ廻されたのである。――とすれば、こう云う場合には、気持の上だけでも、「旦那」系の上級社員に好意を持っているだろう、と思われるのだが、そうでもなさそうな口調であった。まア、会社の方で、そう云うているのやったら、別にわあわあ騒がんでも、ええやろ――あの人らは、と首のあぶない上級社員を指して、今まで楽して来たんやし、それに、やめさせられたから云うて困るようなことあらへん、あれだけ貰てたんやもん、一生食うだけのもんは残してるやろ、などと云った。

そのくせ、共生文学サークル創設者で、一ヵ月ほど前に自殺した中原貞二郎が、「旦那」側の暴力団から、今の専務のやり方を曝露する方法について交渉を受けた、と云う話を田辺音三が持ち出した時には、それ位のこと、わいも「旦那」のために一肌ぬいであげたいなア、恩がえしのつもりで、と云ったのである。――暴力団は、サークルによく顔を見せる小説家石田文次郎を買収して、会社の状態を書かせるよう、中原貞二郎に仲介を頼んだが、ことわられ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

たと云う話であった。

「君かて、その石田たら云う人に、つきあいあるんやろ、ほんなら、君が――わいと一しょに、仲に立って、やろうやないか」

と、田辺音三に、金儲けの期待で心を躍らせながら、云った。そして、なんで、もっと早う、云わなんだ、と呶鳴ったのである。

2

集金人太田亀吉は去年の暮から、色々とものいりが多くて、苦に病んでいた。――

女房が、トラホームにかかって、眼医者に通うし、乳呑児はジフテリヤみたいな病気になって、金をつかわせるし――毎月の五十円の定給からは、そんな病気の予算はしてなかったので、貯金のうちから支出しなければならなかった。それも二円とか三円とか僅かずつ、昼夜銀行から払戻しを受けるのだが、そのたびに、気持がチクチクと痛み、何とはなしに足もとの土がくずれて行くような不安さえ感じるのであった。通帳の記入額がしょっちゅう眼に浮んで、引出した不意の損失が忘れようとしても忘れられず、たまらないと思った。

あほめが、病気なんかにかかりやがって！　と、同じ金をつかうのなら自分も一しょにどこかを思わねば損のような心持さえするのであった。

そこへ持って来て、女房の親爺が死病にかかった。――親爺はもうとっくに働けなくなっていて、二番目娘の道枝が、紙箱工場で稼ぎ、それで何とか暮していたのである。こら、何とか無心にくるぞ、と心配が先に立って、彼は親爺の見舞に出かけ、そこで施療院の所在を書いた紙を置いて来るのであった。――道ちゃんは外へ働きに出るし、弟の秋夫は子供やし、どうしても看護がおろそかになる、うちで不自由な目しているより、ただで専門の医者に十分世話してもろてる方が、よっぽどええ、と云う意見をつけ加えて。

だのに、病人は頑固に、死ぬなら、ここで死にたいと嚊言を云ったのである。そして、ある夕方、雪まじりの風の中を自転車で帰って来ると、ちょうど道枝が風呂敷包みを持って格子戸をあけるのと、ぶつかった。太田亀吉は一切を直感して、家の中へ飛び込むと、そこへ手提鞄を手荒く投げつけて、怒り出した。

女房は正直に、米を少しと、一円だけ金をやった、と答えた。

「そう云うことを一ぺんすると、癖になるんや」

と、彼はどなるのであった。すると、彼には、今までにも、女房は彼に隠して――貯金や彼女の小遣銭のうちからだと、それらの額の内容は毎日調べてよく知っているので、別にへそくりを作っていて、そのうちから、実家の方へ時々貢いでいるのではないか、と云う疑いが起って来るのである。そう云って、彼が責めると、女房は、へそくりのできるかできんかは、あんたが一番よう知ってるはずや、と返事した。それも事実であろう。家事一切の支出については、いつも、太田亀吉は仔細に調べあげ、厳密に女房に質問して、出納簿からはどんな疑点もないようにしてあったから。

だが、それも彼には絶対的には信用できぬ気持が胸のすみに残っていた。――と云うのは、彼自身がへそくりを貯めていたからである。彼は集金の間に、無尽加入者を勧誘しているが、千円の口が一つ取れて、六円の手数料を受取った時も、女房には五百円口だと、三円だけ手渡すのであった。そう云った風だから、――加入者が毎月の掛金に困り、中途でよさねばならなくなり、今まで掛けて来た通帳の権利を誰かに譲る世話をしてくれ、とよく頼みに彼の家へ来る――それが彼のルスである場合、女房がこんな人が来たと報告すると、すぐ手ぶらで来たか、とたずね、彼女が顔をしかめて、何も持って来なかった、と答えるのが多かったが、それもあやしい、手土産物を女房は隠し、金に代え、しまいこんでいるのではないか、とさえ考え出すのである。

女房は、以前やはり紙箱職人をしていた。その当時は、気前のいい、奔放な女工であった。親爺が達者で働いていたせいもあるが、十四日、晦日に渡る日給は、夜遊びや買い食い、弟や妹のものに惜しげもなく使い、近所の子供にも白銅の一枚も小遣にくれてやるほどであった。それが、堅造の――金を費すのが嫌だと云う唯その理由から、女買いも知らず、酒煙草、興行物、店屋物一切の享楽から面をそむけて来た三つとし上の太田亀吉と、媒介者があって一しょになってからは、すっかり、気質も変って了った。亭主と同様、銭湯へ行くのも、月に二三回にしまつし、三度三度、芋粥で満足し、着物も昔の娘時代のものを色あげして縫い直し、髪の形もかまわず、近所つきあいにも、いつも金がなくて困ったような顔して出来るだけ義理を作らぬようにするのであった。少しく快活すぎるほどで、ピチピチとした以前の色気は、二十四の若さでどこかへ消え失せて、今は妙にたるんだように肥えて来、樽のような乳房をしていた。顔の色つやもざらざらとして見え、三白眼は冷くて、笑うと、紫色の歯齦が見えるのである。

何ごとも亭主と気持を一つにして、金を愛し惜しんでい

るのに、疑われるのは、実に残念であったにちがいない。しかし、亀吉の云ったことは讒ではなく、道枝が困り果てると、他に頼りどころもないから、やはり太田の家へ無心に来るのであった。

あのあとで、きっと太田亀吉は、わめきちらすので、彼女は妹の道枝に、もう来てくれるな、と云い渡し、彼女らしい人影にも、どきりとした。

そんな風に已むを得ず、実父の要求に応じた金額は、ちゃんと、貸金として出納簿に記入してあったが、それが十円を越えた時、太田亀吉はとうとう泣いて怒った。

「わいはなア、昼飯一つも表で食わんようにして、遠いとこ行ってても自転車で、うちへかえって来るんやぞ、ほしいもの一つ食わず、しまつにしまつしてて、みんなお前のうちに搾られてたら、ええ面の皮や、あほらしい、——どうせ取られて了う金やったら、わいは好きなことして使うて来たる、あほらしい、カフェーたら云うとこ行って来たる！」

そして、老後のための蓄えもないのは、おやじが甲斐性なしだからだ、と幾度も繰りかえした後、貯金帳をいつも持って歩く皮の擦れ切った手提鞄に入れると、同じく泣いている女房を睨んで、外へ飛び出して了った。だが、もとより、冷い空気に触れると、さっきの元気はなくなり、自転車を押して暫く歩き、場末の町によくある広場の野師の口上を聞いていたりするのであった。それから、市、区の附加税を合せて、一円八十六銭もの自転車の府税通達書が来ていたのを思い出し、金を出さねばならぬ時の癖で、チェッと舌打ちして、結局社用のために必要な自転車だから、会社に払って貰うよう一度交渉しよう、と落ちついて考えたりしていた。すると、街頭賭博がそこらに警官の眼をぬすんで行われてる、さア、はったり、はったり、はって悪いはおやじの頭、さアと懸け声しているのに誘惑されて、税金ぐらいは勝ってやろう、と十銭位ずつ人は賭けていたが、彼は、考えて五銭だけ出すのである。ガラガラと、湯呑の下に転がった賽は、彼の張った目とはちがい、五銭とられ、またためらいつつも、財布から白銅を摑み出した。それも駄目、次も目が出ず、集金人太田亀吉は、さっきの昂奮のあとのせいもあって、蒼ざめて家へ帰った。——お前のおやじのおかげで、また十五銭も損をしたぞ、そう強く云ってやろうと、口をもぐもぐさせながら。

そんなにまで、太田亀吉夫婦を悩ました父親もとうとう、霜の厚い朝、陽の昇る前に死んで了った。秋夫が駈けつけて、そのことを告げに来た時、彼はもう出社のつもりで、洋服をきていた。はっと、胸に来たのは葬礼の費用のことであった。十七円、融通したあと始末のことであった。

「秋夫、露路の人、来てるか」と聞くと、
「向いのおばちゃんと、表の家守のおばあちゃん、来てはる」
と、子供は答えた。
「よっしゃ、お前、わいがもう会社へ行ってしもてた云うとき。ええ子やよってに」
そう云い含めて、この際、できるだけ遅く行くに越したことはないとした。現金を使わずに済ます方法であった。こまごまとしたものは、誰かが立て替えて置いてくれるだろう。そのうち些少にもせよ、香典が集るだろう。それらが相殺するにちがいない。余分が残れば、十七円の貸しの方へ入れて貰わねばならない。本当云えば、利子にも当らないだろうけれど。——そう、急いで胸のうちに考え、女房には、太田は会社へ行って集金に廻ったから、知らせる法がちょっとなく、どんなに早くても、おひる家へ帰ってびっくりしてからでないと、来られない、私も少し身体が悪くて、おくれました、とみんなアイサツせえ、と云って聞かせた。女房は、香典にどれだけ持って行ったらええやろ、とたずねた。太田は、
「あほめ！」
と、どやしつけ、「親の死んだのに、香典出すやつがあるけえ」と云った。
「親や云うても、わてはこの家へ嫁入りしてるんやし、やっぱり、出さんならんと、ちがいまっか」
と、女房は、よくのみこめぬ風であった。
「しょもないこと云うてんと、あっち行ったら、集った金や、使うた額を、ちゃんと記けとくか、おぼえとかんと、貧乏人ばっかりやによってに、ごまかしよるぞ」
彼は、大きな口に冷笑を浮べて、狭苦しい、露路奥の家で、働き人の女房たちが寄って騒いでいる有様を想像するのであった。
あとに残った道枝と、秋夫との始末については、彼は独断で計って了った。即ち、秋夫は小学校の四年生で、飯を食う盛りだから、家で世話しても道枝の稼ぎだけでは損をすると、東区にあるヨハネ童園と云うのに預けた。そこは、孤児か貧乏な片親だけで教育に手のとどかぬ児童を収容していて、キリスト教の一派の経営であった。
道枝は、朝早くから夜おそくまで、四十銭を得るため働いていたが、太田亀吉の腹では、できるだけ早く、誰かに片付けて、ついでに秋夫の今後の保護もさせようと思っていた。すると、同居人の田辺音三が、彼女に気があるらしいのを見て、彼ならば商業学校を出ているし、仲々むずかしい本を読んでいるし、それに会社の月給は彼よりもよいから、二人をくっつけようと、女房とも相談していた。女

房は、別に反対と云うほどでもないが、あんな女たらしは心配や、とも云うのであった。

3

君かて、その石田たら云う人に、つきあいあるんやろ、と太田亀吉に云われた時に、文学青年田辺音三は、

「うん、よう知ってるけど――けどな、その問題については、石田君は」と、君づけに呼んで太田亀吉を安心させ――「石田君は承知せえへんらしい――とにかく、中原君が、あれやこれやと板挟みになって、自殺してしもた位やによってにな」

と、石田文次郎の話は、それで打切り、道枝のことでも噂しようと思った。

「えらい、おそいな」

「いや、そら、もう一ぺん、当って見んと分らん、何も向うかて――小説書くのが商売や、こんなん書いとくなはれと、銭積んで頼んだら、何も権式ぶることあれへんやろ」

と、尚も太田亀吉はその話題に食いついて放さなかった。

「あかん、あかん、あいつは、そんな融通のきくやつや、あらへん」

「そやけど――何か、その小説家は、今の専務はんのお抱えか、旦那はんの方の仕事ならでけん云うわけか、ちがう、ちがうのか、ほんなら、何も――」

文学青年田辺音三は、さすがに、苦笑して了い、油のついた長い髪を撫でていた。

実を云うと、彼は、十分材料さえ集めて提供するならば、別に買収しなくても、唯今の会社の状態を、石田文次郎は曝露してくれそうな気もするのであった。――だが、彼は、その小説家が嫌いで、逢うのだって好ましくないのに、わざわざ――殊に、彼とはサークルのうちでは最も親しかった中原貞二郎さえこの話のあった時、どう云うわけからかそんなあほらしいことを云って行けるかと、感想をもらしていたのに、わざわざ頭をさげて、頼みごとに出かけるのは、どうにも癪であった。

それに、実のところは、その小説家に逢ったのも、ほんの一二度に過ぎなかった。共生文学サークルの会合で、顔を合せたのである。もちろん、その僅かの機会でも、彼は石田文次郎に十分、自身を印象せしめたと云う自信はあった。

どうして共生無尽社員と石田文次郎がつながりを持ったか。――彼のところへ出入りしていた中原貞二郎が、雑談のうちに、幾度も会社の内幕話を打明けたりしている間に、いつしか、それが小説家の頭の中で、一つの作品として構

成されて来たらしく、遂に去年の秋、「栄え行く道の一例」と云う標題で、ある雑誌上に発表された小説になって現れた――そのことが、きっかけになったのである。

それまでにも社員のうちには、文学を嗜んでいるのも決して少くはなかった――以前の「旦那」が総支配していた時代は、新聞雑誌の飜読さえ禁止されていたと云う讒みたいな事実もあり、文学青年中原貞二郎なぞは、書店で雑誌の立読みしているのを見つけられて、そのために危険思想の持ち主であると、刻みづけられたことさえあったが、それらの禁止が撤廃されると、社員たちは急に、窒息していた部屋から、清澄な外気の中へ飛び出たような気持で、新しい知識や感覚を大急ぎで吸収し、文学についても語りあう連中が、自然に仲間を形成していたのである。しかし、それまでは、文学を遠くから、外部から見物していると云う態度であったのが、「栄え行く道の一例」が出た後には、初めて、内部から、自分たちに近いものとして、文学に親しみを覚えた。それは、小説と云うものは、何かちがった世界を空想のうちに美しく仕立てあげるものと無意識に決めていた彼らの考えを裏切ったからである。――そこには、自分たちの会社のことが、自分たちの日常や気持が、ある程度まで描かれてある――みんな自分たちの親しく知っていること、それらが、文字になって物語られているのは、何とはなしに、不思議にさえ思えるのであった。

そして、自分たちの生活を形象化した小説家も、自分たちに好意を持っているような気がし、その好意が反射して、彼に逢いたくなったのである。――中原貞二郎は、彼を連れて来た。「栄え行く道の一例」は殆んどすべての社員に読まれたが、そのうちでも積極的に文学に関心を持った連中が、中原貞二郎の下宿へ集って、彼の来るのをガヤガヤとしゃべりながら待っていた。

ところが、姿を現した小説家は、彼らの期待から外れていた、と云える。暗黙のうちに、彼らはそこへ、深遠な芸術の匂いのする風采を待ち構えていた。しかし、石田文次郎には、普通の町人とちがう点は少しも見出せなかったのである。且又、彼らは知識の重みを感じさせる言葉が吐かれるにちがいない、と、それを理解するために、稍かたくなって、耳をそば立てていたが、小説家の歯の抜けた口からは、平凡な談笑しか洩れて来なかった。――事実、石田文次郎から、背中をどやしつけるように意想外な、天才風のおどかし文句や、気の利いた云い方による晦渋な金言を要求する方が、まちがっていた。彼は簡単な平易な真実を、複雑に難解に表現する能力には欠けていた。

そうした小説家の有様は、文学好きの社員たちに、失望とともに、気易さを与えた。――彼を中心に、文学を語る

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.